

6) ヤナ漁獲アユの蓄養時にみられる急性スレ症の遅延試験

澤田 宜雄

【目的】3月から6月にかけて琵琶湖から河川に遡上し、ヤナで漁獲されるアユ（以下、ヤナアユ）は主に全国の河川放流用種苗として出荷されている。ヤナアユは漁獲後1～3日間蓄養された後出荷されているが、従来から蓄養等の高密度の環境におかれるとお互いに相手を攻撃し合い（いわゆる「コツキ合い」）、急性のスレ症を誘発し、へい死する場合が多い。そこで、ヤナアユの急性スレ症を軽減もしくは遅延させることを目的として、その対策方法を検討した。

【方法】供試魚はヤナアユおよび仕立てアユを用い、各種苗の単独飼育および混合飼育の計3試験区について無給餌で飼育し、スレ症によるへい死状況を記録した。

各試験区の詳細は表1に示した。今回の試験ではスレ症以外の要因を排除するためにヤナおよび仕立てともに漁獲後に27～28℃、3日間の加温処理を行った種苗を用いた。

試験は90cmガラス水槽（水容量125ℓ）を用い、各水槽にアユを66尾ずつ収容し、地下水（18±1℃）をかけ流しで無給餌飼育した。飼育期間は平成10年6月18日から6月26日の9日間で、へい死魚は計数して毎日取り除いた。

【結果】各試験区の日毎のへい死率の変化を図1に示した。日毎のへい死率は（当日のへい死数／前日の生残数）×100で示した。

ヤナアユ単独飼育（試験区1）では開始後2日目からスレ症によるへい死が発生し、3日目にはへい死率が最も高くなった（26.3%）。一方、仕立てアユ（試験区2）および混合飼育（試験区3）ではスレ症によるへい死の発生はヤナアユより4日遅い7日目で、両試験区ともこの時に高いへい死率を示した（試験区2：37.9%、試験区3：39.4%）。

無給餌でアユを飼育する場合、ヤナアユでは早くからスレによるへい死が起こるのに対し、仕立てアユではヤナアユと同様にスレによるへい死は発生するが、ヤナアユより数日遅れて発生するものと思われた。また、ヤナアユに仕立てアユを1：1の割合で混合することにより、スレによるへい死を遅らせることができるものと思われた。

ただし、実用面を考えた場合、混合する仕立てアユの割合をどこまで少なくできるのか、また、他の方法（給餌等）による対策も検討していく必要がある。

表 1. 各試験区に供したアユの詳細

| 試験区 | 区分 | 漁獲日 | 漁具 | 体型 | 収容尾数 |
|-----|-------|------------------|---------|-------|------|
| 1 | ヤナアユ | 平成10年6月12日 | ヤナ | 5~8g | 66 |
| 2 | 仕立てアユ | 平成10年3月19日 | エリ(選別小) | 7~10g | 66 |
| 3 | 混合 | ヤナアユ33尾+仕立てアユ33尾 | | | 66 |

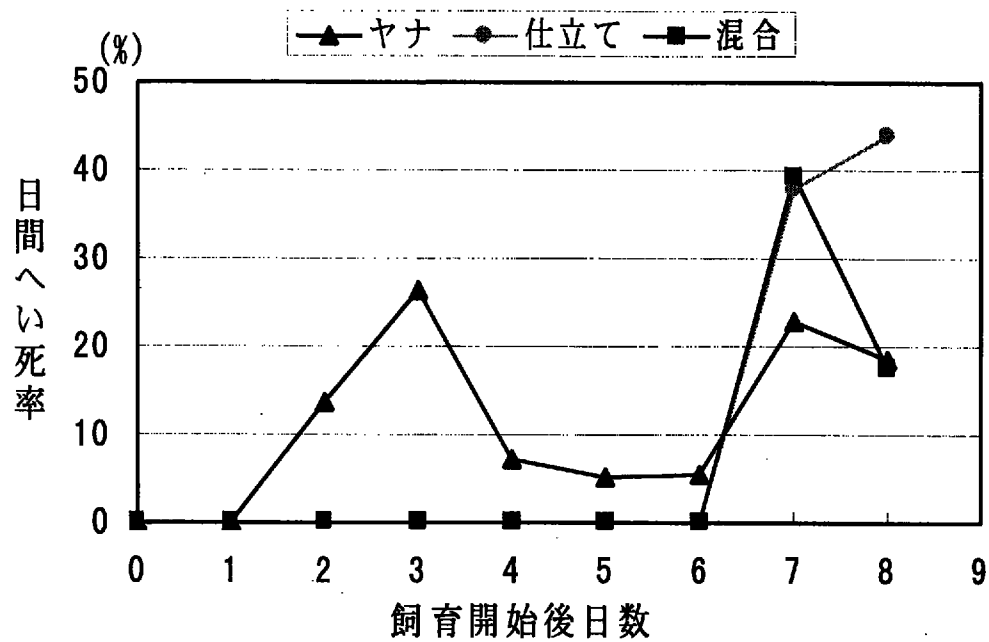


図 1. 各試験区の日毎のへい死率の変